

東福寺 本堂・正向阿弥陀如来絵像

埼玉県春日部市



東福寺の山号は菩提山、院号を正向院といい、寺の開基は不明であるが、次のような寺伝と伝説を残している。すなわち、親鸞聖人が関東下向のおりこの寺に一宿した。このとき親鸞聖人は自ら筆をとり正向の阿弥陀如来を描いて寺に残したことから正向院を命名したという。また、後年の延享年間(1744 - 1748)、寛延年間(1748

- 1751) 本堂が消失した際、この画像は自ら飛来して、老松の枝にかかり難を逃れたという伝説も残っている。東福寺は真言寺院ではあるが、これを寺宝として今日まで大切に伝え、またこの絵像は宗派に関わりなく、近在の人々の信仰を得ているという。それを象徴するかのように、寺の山門脇には、正面に「靈宝正向阿弥陀如来」と彫られ、側面下に「親鸞上人筆」と小さく彫られた高さ1mほどの案内石が建てられている。

(「埼玉の真宗」写真展より転載)



東福寺 正向阿弥陀如来絵像

【春日部市八丁目(真言宗智山派・東福寺蔵)】

- ・絹本着色
- ・縦 82.5 cm 横 34.5 cm
- ・正面を向いて来迎する阿弥陀如来像
- ・室町時代後期、浄土真宗の仏画師によって作成か。